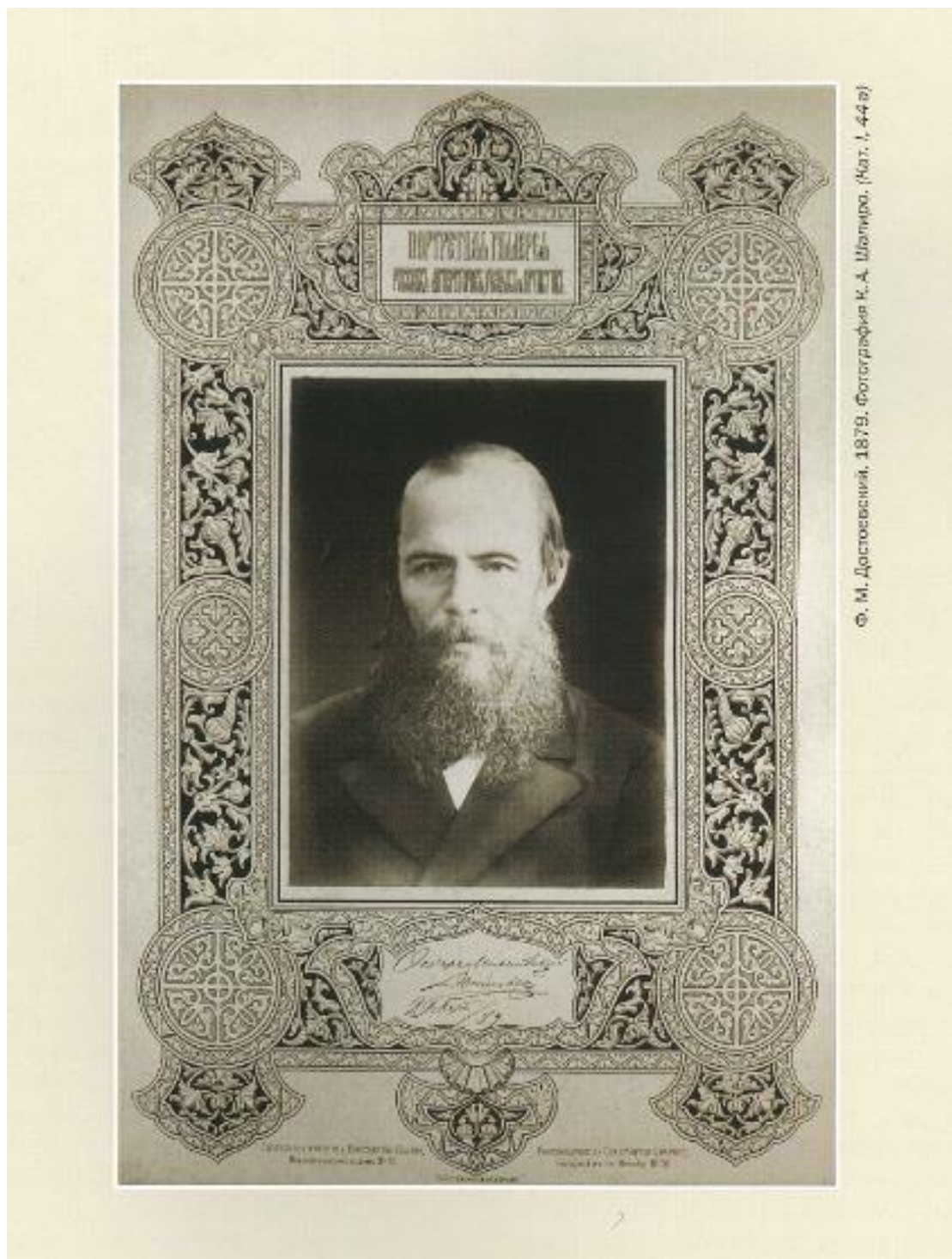


## ドストエフスキイの肖像画・肖像写真・8

『カラマーゾフの兄弟』執筆中のドストエフスキイ（1）



## [1]

★前回の⑦で我々が見た写真は、息子アリョーシャを亡くしたドストエフスキイが、その後残された家族と共に夏の住まいがあるスターラヤ・ルッサの町に移り、この写真家ロレンコーヴィチに撮影を依頼したものでした。しかしこの写真の撮影日時は、1878年の夏ということ以外には分かっていません。これに対して今回紹介する写真は、前ページに掲載したメインのものを入れて全部で4枚、1879年3月29日、ペテルブルクの写真家K・A・シャピロが撮影したものと判明しています。

写真家シャピロは、『ロシア文学者・学者・芸術家肖像写真集』の題名の下に、二巻の写真集を刊行しましたが、その第一巻目にゴンチャロフやツルゲーネフ、またネクラソフやサルトウイコフ＝シチェドリン、そしてドストエフスキイ等々、当代屈指の作家の肖像写真を彼自ら撮影したのです。その際シャピロは、予め作家たちに依頼状を送って同意を求めたのは当然として、更に撮影当日も写真館への来館を依頼する書状を送るなど、丁寧な仕事の手続きを踏んだため、撮影日時や場所等が明確に確定されることになったのです。

それゆえ1879年3月29日、この写真家が撮影した4枚の肖像写真を、我々はドストエフスキイ自身の生活史の中に正確に位置づけて見ることが可能となるでしょう [後の2のテーマです]。また1879年の3月とは、『カラマーゾフの兄弟』執筆さ中のことであり、我々はこれらの写真を、作品の具体的な内容展開との関連で、様々に思いを巡らせて見ることも可能となるでしょう [後の3のテーマです]。

★これらの考察を試みる前に、我々の課題は、まずは自分自身の目と心で4枚の写真と向き合い、そこから自分が何を感じ取るのか、明確にしておくことです。この作業こそ、そこに含まれる主観的な過誤の危険性も入れて、ドストエフスキイ研究会が取ってきた基本的な姿勢・方法論であることは前回も記した通りです。(これは、「研究会便り」の別のサイト「予備校 graffiti」の最後に掲載する小出次雄先生のデッサンとの取り組みにおいても、同じように皆さんにお勧めしている姿勢・方法論です)、この後の [2] や [3] に進む前に、以下のような簡単な交通整理を試みながら、暫くこれら4枚の写真そのものと向き合っておきましょう。

次ページに掲載する4枚の中で、①は前ページと同じ写真です。周囲の装飾からも明らかなように、シャピロが自分の撮った4枚の中から、写真集に掲載すべく最終的に選び採ったドストエフスキイ像です。②は、やや右前方を見つめるポーズ。(下方はシャピロ写真館の定型装飾です)。②と同じポーズの④には、周縁の装飾がありません。③は、②と④とは対照的に、やや左前方を見つめるもの。ドストエフスキイ研究家チホミーロフによれば、ドストエフスキイはこれらシャピロから提供された写真を都合十枚以上、友人や親族等に贈呈したのです。(『ドストエフスキイの肖像—肖像写真、肖像画、線描画、彫刻に於ける—』2009、ペテルブルク)。

さてこれら4枚の写真は一見似て見えますが、実際にはそれぞれの表情は相当異なっています。

それらを如何に理解し、心に納めたらよいのか、そう容易なことではありません。暫くはこれら4枚と向き合い、自分自身のイメージを形づくるよう試みた上で、「2」と「3」の記述と突き合わせて下さい。当然のことですが、私が記すことも私の主観に基づくものであり、絶対的な基準ではありません。マニュアルのない「混沌」——「ドストエフスキイ体験」に身を曝しましょう。

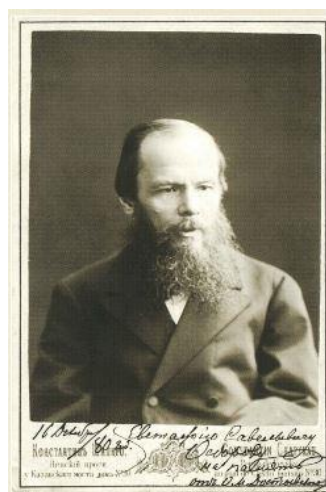
①



②



③



④



## [2]. ドストエフスキイの生活史の中で

1879年3月29日、シャピロの写真館で撮影された4枚の写真を、ドストエフスキイの生活史の中で見る時、どのようなことが浮かび上がってくるのでしょうか。

まず注目したいことは、当時ドストエフスキイがロシアとヨーロッパにおいて獲得していた名声のことです。写真家シャピロが出版した『ロシア文学者・学者・芸術家肖像写真集』。先に記したように、その第一巻目は、当代の錚々たる作家たちの肖像写真集でした。当時既にドストエフスキイは、ゴンチャロフやツルゲーネフ、ネクラソフやサルトゥイコフ＝シチェドリン等と肩を並べるロシアの代表的な作家としての位置を確立していたのです。(ドストエフスキイと比肩されるトルストイは、彼独自の世界観と宗教観から、ペテルブルクとモスクワの上流社会やロシア文壇とは距離を置き、またドストエフスキイと会うこともありませんでした。これは実に興味深いテーマなのですが、ここでは取り上げる余裕がなく、また別の機会に扱いたいと考えています)。

当時ドストエフスキイが得ていた社会的名声を証する例は少なくありません。例えば彼は「文芸基金のための朗読会」や各種の学校や慈善団体などの集まりにしばしば招かれ、講演や自作を始めとする様々な作品の朗読をしたのですが、彼の類い稀な弁舌・朗読の才は、それに触れた人々の心を震撼させたと言われます。そのピークが翌1880年6月8日、プーシキン記念祝典にあたりモスクワで開催されたロシア文学愛好家協会主催の公開講演会です。ここでドストエフスキイが行った「プーシキン演説」が引き起こした感動と熱狂は、彼の生涯における、またロシア文学史における一つの頂点をなす事件となるのですが、これについては次回の⑨で取り上げましょう。

またこれらの写真が撮られた直後の4月、ドストエフスキイの許には、国際文学会から、6月にロンドンで開かれる会議への出席を依頼する招待状が届けられます。この会議ではフランスのヴィクトル・ユゴーが名誉会長の座に就くことになっていました。かつて『夏象冬記』の旅(1862)の後半、ドストエフスキイは折しも出版されたばかりのユゴーの『レ・ミゼラブル』を、旅はそっちのけで読み耽ったのでした(この作品が如何に深く強くドストエフスキイ世界と響き合うかについても、改めて論じたいと考えています)。しかしこの名誉ある申し出にも拘らず、ドストエフスキイは肺の病が思わしくなく(肺気腫とも肺癌とも言われていますが、この夏彼は、ドイツのエムスに鉱泉治療を受けに赴きます)、また彼は『カラマーゾフの兄弟』の執筆にも忙殺されており(次の[3]を参照)、丁寧な断りの返事を返したのでした。そして6月、ロンドンで会議が開かれ、その半月後、彼の許には名誉会長のユゴーその人から、トルストイとツルゲーネフと共に名誉会員に選ばれたとの知らせがもたらされます。名実共にドストエフスキイは、ロシアを代表する作家としての地位を不動のものとしたのです。

もう一つ例を挙げておきましょう。当時ロシアに赴任していたフランスの外交官で伯爵のM・ヴォギュエは、『カラマーゾフの兄弟』執筆中から死に至るまでのドストエフスキイと折に触れて出会い、その後書き上げる『ロシア小説』(1886)で、ドストエ

フスキイをプーシキンやゴーゴリ、そしてツルゲーネフやトルストイと共に取り上げ、ドストエフスキイ文学に関するその評価の適否は措くとしても、ヨーロッパにおけるドストエフスキイの名声を更に決定的なものとすることに一役を果たします。

このような事実を背景に置いて、シャピロ撮影の肖像画①に目を向けてみましょう。正面を見据える端正で理知的な両眼。これと並行するクッキリとした眉毛の稜線。その上の広く高い額。これらを縦に貫く鼻梁。更にこれら全てを受け止める口髭と軽く結ばれた唇——ここに現れ出ているのは、何よりもまずドストエフスキイの深く透徹した精神性と言うべきものでしょうが、更に我々はここに彼が社会に対して示す公式な顔、つまり真摯で生真面目な表情を見て取るばかりか、自らの社会的地位と使命とを自覚した落ち着いた自信のようなものさえも感じ取れるように思われます。しかしここにあるのは決して世に魂を売り渡した卑俗さなどではなく、飽く迄も真摯な思索家、求道者としての高潔さと静謐さであり、正にロシアを代表する作家に相応しい精神性を湛えた堂々たる相貌と言うべきものでしょう。

これに対して②と③のそれぞれには、また別のドストエフスキイが映し出されているように思われます。②(と④)のやや右を向き、③では逆にやや左を向いた姿勢は、恐らく写真家シャピロの指示に従って取られたポーズなのでしょうが、この写真家はこれら二つのポーズによって、ドストエフスキイの対照的な二つの内面を見事に捉えたと言えるでしょう。

まず②と④のドストエフスキイとは、思索し苦悩するドストエフスキイその人と思われまふ。やや右を向いたこれら二枚の写真が写し撮った両眼には(①と③においてもそうですが)、人間と世界とその歴史の奥底にどこまでも分け入ってゆき、そこに存在する問題を見据える、あるいはそれらに見据えられる、厳しい思索家としてのドストエフスキイが現れ出ているのではないのでしょうか。これらの相貌は何処までも内に沈んでゆくもので、④よりも②の方がずっとその苦悩と深刻さを増したものに思えます。当時のロシアと西欧を代表する作家ドストエフスキイとは、それらの社会が抱える問題を見据え、それとの命懸けの戦いを繰り広げる思索家であり、彼が担う栄光とは、その背に負う苦悩と孤独に他ならないことがひしひしと伝わってくる写真だと言うべきでしょう。

これら二つの写真が、もし④から②の順に撮られたとするならば、その僅かの間にドストエフスキイは疲れ、老けてしまったかのようにあり、痛ましきさえ感じさせられます。これら②と④の写真は、「残酷なる才能」の人とも言われる(ミハイロフスキイ)ドストエフスキイが、その肩に負わされた荷の重さを、またその創作の現場で見せる妥協のない思索の厳しさと孤独を映し撮った見事な悲劇的芸術作品とも言え、我々は写真家シャピロの手腕にも注目せざるを得ません。

これら②と④に対して、やや左を向く③はかなり異なった印象を与えます。つまりシャピロは被写体の姿勢を右から左へと半転させることによって、鋭利で、しかも生

気に溢れたドストエフスキイを、これもまた見事に映し撮ったと言えるでしょう。長く魂を悩まされていた問題に対する答が閃き、豁然たる表情が輝き出した瞬間のドストエフスキイとでも言うべきでしょうか。前々回（第6回目）に見た、1875年H.ドースが撮影した写真と同じく、ここにはほんの少しですが微笑みさえ浮かんでいるように思われます。②と④が奥に引き込み、内に厳しく沈潜するドストエフスキイであるとするれば、これは前に輝き出るドストエフスキイだと言えるでしょう。暗に対する明。闇に対する光。これもまた厳しく孤独な思索の現場で、ドストエフスキイが一瞬垣間見せる表情だったのでしょう。

ドストエフスキイに向かう写真家シャピロが、この被写体の内に只ならぬリアリティを感じ取っていたことが、この4枚の写真からはひしひしと伝わってくるように思えます。自らの写真館でドストエフスキイと対した時、シャピロは当代屈指の有名作家であるドストエフスキイを超えて、目の前に写真芸術の対象としてのドストエフスキイ、その類い稀なる精神性をハッキリと見て取ったのでしょう。この写真家から、そして彼が撮った4枚の写真から教えられることは少なくありません。我々は最終回にも、この写真家が向き合った「死せるドストエフスキイ」について検討したいと思います。

### [3] . 『カラマーゾフの兄弟』 と対応させて

次にこれら4枚の写真を、ドストエフスキイ自身の『カラマーゾフの兄弟』との取り組みの流れの中で考えてみましょう。そのためにまず1879年、この年雑誌「ロシア報知」に発表された『カラマーゾフの兄弟』の内訳を、ドストエフスキイ研究家L.グロスマンの報告に拠って確認しておきたいと思います(新潮社版『ドストエフスキイ全集』別巻、1980)。

- ・ 1月号、第一部第1・2篇、(執筆は78年夏、11月初めに原稿送付)
- ・ 2月号、第一部第3篇、(79年1月中執筆、1月30日送付)
- ・ 4月号、第二部第4篇、(執筆は2月と3月)
- ≪3月29日、4枚の写真の撮影。シャピロ写真館≫
- ・ 5月号、第二部第5篇 1-4章、(4月から5月初めの執筆、5月10日送付)
- ・ 6月号、第二部第5篇 5-7章、(5月執筆、6月9日送付)
- ・ 8月号、第二部第6篇、(6月と7月執筆、8月7日送付)
- ・ 9月号、第三部第7篇、(8月と9月前半執筆、9月16-19日送付)
- ・ 10月号、第三部第8篇 1-4章、(9月半ばから10月半ばまで執筆、10月半ば送付)
- ・ 11月号、第三部第8篇 5-8章、(11月15日送付)

1879年とは、ドストエフスキイが大車輪で『カラマーゾフの兄弟』と取り組んでいた年であることが分かります。またこの一覧表が示すように、シャピロによって写真が撮られた3月29日とは、ドストエフスキイが『カラマーゾフの兄弟』の第二部第4篇（「<sup>ナドルイフ</sup>Надрыв（激情の奔出）」）を書き終え、次の第5篇（「<sup>プロイコントラ</sup>Pro и contra（肯定と否定）」）に取り掛かろうという時でした。つまり『カラマーゾフの兄弟』の最大のヤマ場に差し掛かる時だったのです。我々はここで更に、写真撮影前後の作品の進捗状況について、主に内容的な面から確認をしておく必要があるでしょう。

第一部においてドストエフスキイは、まず第一篇でカラマーゾフ家の人物たちの前史を紹介し（「ある家族の歴史」）、続く第二篇においては、聖者ゾシマ長老の前で、「神と不死」の問題を巡り、彼ら一人一人の現状を曝け出させ（「場違いな会合」）、更に第三篇ではドミートリイとスメルジャコフに光を当てた後、今度はカラマーゾフ家の家長フォードルの前で、「神と不死」の問題に関して、改めてイワンとアリョーシャにそれぞれの姿勢を表明させます（「好色漢たち」）。ここまでの三篇で、作品全体の見取り図がほぼ全て提示され、その中心テーマが「神と不死」の問題であることがはっきりと打ち出されるのです。

続く第二部（第四篇、第五篇、第六篇）においてドストエフスキイは、ゾシマ長老の死とフォードル殺害事件という二つの死を決定的駆動力として、いよいよカラマーゾフ家の兄弟四人をして、第一部で提示した「神と不死」発見の旅へと踏み出させます。まず第四篇（「<sup>ナドルイフ</sup>Надрыв（激情の奔出）」）では、イリュージン少年の悲劇に寄り添うアリョーシャが描かれ、そこから「神と不死」を巡るこの作品の具体的な中心テーマが、「実行的な愛」であることが明らかとなるでしょう。次の第五篇（「<sup>プロイコントラ</sup>Pro и contra（肯定と否定）」）においては、この「実行的な愛」が福音書のイエスと「キリストの愛」に根差すことが示され、この「キリストの愛」を巡りアリョーシャとイワンとの正面からの対決が描かれます。続く第六篇（「ロシアの修道僧」）では、イワンによる神と「キリストの愛」の否定を受けて、アリョーシャによる師ゾシマ長老の生涯と思想の提示がなされます。いわゆる「愛の讃歌」で終わる「ゾシマ伝」です。

シャピロによる4枚の写真撮影を挟んで、ドストエフスキイはいよいよアリョーシャとイワンとの対決へ、つまり「キリストの愛」を挟んだ、「実行的な愛」の人アリョーシャと、「大審問官」の叙事詩を提示する無神論者イワンとの正面からの対決へと乗り出してゆくのです。

以上のことを、ドストエフスキイ自身の証言からも確認しておきましょう。この年の末12月のことです。ドストエフスキイは、サンクト・ペテルブルク大学の学生たちのための文学朗読会で、半年前に書き上げた第五篇「大審問官」の劇詩を朗読するのですが、彼は朗読に当たっての「前置き」として、この「大審問官」によって自分は何を描いたのか、極めて端的に解き明かしをしています。つまり自分が描いたのは、「キリストの大理想」の代わりに「新しいバビロンの塔」を築いてしまった「無神論者」について

なのだと（グロスマン、前述書）。

3月29日のシャピロ写真館における写真撮影の後、二ヵ月間にわたりドストエフスキイが魂を削って書き上げる「大審問官」の劇詩——現代に至るまで人々の魂を震撼させ続けるこの劇詩とは、まずは悪魔に魂を委ねたイワンの「否定の精神」が積み上げてきた「バビロンの塔」の総括、つまり神否定に続く「キリストの愛」の否定という「大事業」の提示だったのです。またそれと同時に、この「無神論者」イワンの「大事業」に対してドストエフスキイは、弟アリョーシャに「キリストの大理想」を、つまり「キリストの愛」・「実行的な愛」を正面から提示させるのです。ドストエフスキイ文学最後の集大成、「肯定と否定」の最も原理的で激しい対決が、福音書的磁場を土台として、いよいよここに繰り広げられてゆくことを確認しておきましょう。

「大審問官」を始めとするイワンの思想と行動、またこれに対する弟アリョーシャの思想と行動の詳細は、ドストエフスキイ研究会で積み重ねてきた作業の総決算として、以下を参照して下さい。

・拙著『カラマーゾフの兄弟論 — 砕かれた魂の記録 —』（河合文化教育研究所、2017）

・「ドストエフスキイ研究会便り（8）～（13）」

河合文化教育研究所HP、2017-2019

『カラマーゾフの兄弟』の内容に関する以上の概観を踏まえ、改めてシャピロによる4枚の写真を検討してみましょう。

先に我々は、やや右斜め前方を向く②の写真が映し撮ったのは、苦しみつつ思索するドストエフスキイであると考えました。このドストエフスキイとは、正にこれから「大審問官」の劇詩の執筆に取り掛かるドストエフスキイ、つまり人間と世界とその歴史が抱える「Pro <sup>フロイ</sup> <sup>コントラ</sup> <sup>イ</sup> contra（肯定と否定）」を前に、その究極の答えを求めようとするドストエフスキイだと考えられるのではないのでしょうか。上で確認したように、これから二ヵ月間にわたり、神否定に続く「キリストの愛」の否定という、「無神論者」イワンの「大事業」に思いを凝らすドストエフスキイが、この②の写真が写し撮ったドストエフスキイであり、また④のドストエフスキイであったと考えても決して不自然ではないでしょう。むしろそう考えて初めて我々は、そこに写し撮られたドストエフスキイの厳しい相貌の奥行きを、つまりは彼が取り組んだ仕事の深刻さと重大さを、改めて実感出来るように思われるのです。

またドストエフスキイが更にその先に描くのは、イワンとスメルジャコフによる「父親殺し」の決行と、それに対する懼るべき裁きの現前、「悪業への懲罰<sup>カラ</sup>」のドラマであることも忘れてはならないでしょう。シャピロによる写真撮影の後、ドストエフスキイはいよいよ悪鬼に憑かれた主人公たちを、血の「一線の踏み越え」へと追い込み、その闇



の底に「光」を見出し得るのかどうかを試みてゆくのです。②と④の二枚は、その悪鬼と対決するドストエフスキイであると共に、その悪鬼そのものが取り憑くドストエフスキイであるとも見得るでしょう。

これに対して③の写真が表わす、鋭利で生気に満ちたドストエフスキイとは、一切を否定した兄イワンに対して（そして遂にはこのイワンを尻目に、否定の道を最後まで歩み通すスメルジャコフに対しても）、「肯定」の存在アリョーシャをぶつけてゆくドストエフスキイだと考えることが出来るでしょう。つまりここにいるのは、悪魔の「否定の精神」に憑かれた二人の異母兄弟イワンとスメルジャコフに対し、「実行的な愛」を以って毅然と向き合う弟のアリョーシャを描くドストエフスキイであると言えるでしょう。彼が湛える微かな微笑みは、その先の第六篇と第七篇において、ゾシマ長老とアリョーシャとを介し、闇の中に輝く光を描くドストエフスキイの微笑みであり、我々は更にその微笑みの内に、そこに射し込む天来の光を見て取ることも、決して不可能ではないと思われま

纏めてみましょう。

②（と④）のドストエフスキイに対する③のドストエフスキイ。これら対照的な両面を含んで、①のドストエフスキイがいる——簡単ですが、シャピロが撮った4枚の写真から浮かび上がるこの構図は、そのまま『カラマーゾフの兄弟』が持つ弁証法的な構造であり、作者ドストエフスキイの魂の骨格を映し出すものだと考えられるのではないのでしょうか。簡単ですが、これを今回の我々の結論としたいと思います。

なお『カラマーゾフの兄弟』に或る程度親しんだ人は、更にこれら4枚のドストエフスキイを、カラマーゾフ家の兄弟4人それぞれと対応させてみるのも面白いかも知れません。今の私には、これらの写真一枚一枚が皆、ドミートリイの、イワンの、スメルジャコフの、そしてアリョーシャの相貌を映し出すものと思われ、これが誰で、あれが誰だと最終的に限定し確定するまでには至っていません。そのことが可能かどうか分かりません。それだけカラマーゾフの兄弟たちは皆、実に多様で複雑で、豊饒さに満ちた存在としてあるのです。なおゆっくりと時間をかけて、この課題と取り組んでみようと思っています。皆さんも、この課題を心に留めておいてみて下さい。そして機会があれば、互いの感想と意見をぶつけ合いましょう。ドストエフスキイ研究会とは、先にも記したように、ドストエフスキイ的「混沌」を前に、常にこのような問いを発し、開かれた討論の場としてあり続けてきました。どこにも解答など用意されていないところでの問いの工夫と思案。これこそ、ドストエフスキイ自身が苦しみつつ進めた思案であり創作だったのではないのでしょうか。

### 《次回と最終回の写真について》

★ドストエフスキイの『カラマーゾフの兄弟』との取り組みは、今回見た1879年3月末から、なお翌年1880年の秋11月8日に至るまで、一年半余り続きます。1878年夏の執筆開始から通算すると、足掛け3年にわたる長丁場の執筆作業です。我々が次回の第9回目で取り上げる写真は、『カラマーゾフの兄弟』執筆中のドストエフスキイ(2)、1880年6月9日、モスクワの写真家パノーフが撮影したもので、これがドストエフスキイ最後の肖像写真となるでしょう。そこに写し撮られたのは、カラマーゾフの第十一篇1-5章執筆の頃のドストエフスキイですが、この彼の表情もまたその生活史と呼応し、更には『カラマーゾフの兄弟』の創作状況とも密接に響き合ったものとして、様々な考察を加え得るでしょう。

この写真は既に「ドストエフスキイ研究会便り」の目次の中で、「ドストエフスキイの肖像画・肖像写真について」の項に掲載してあります。次回まで、これとゆっくり向き合っておいて下さい。ここに写し撮られたドストエフスキイを、皆さんはどう見るでしょうか。

★ドストエフスキイは、『カラマーゾフの兄弟』を書き終えてから(1880年11月8日、最後の原稿を送付)、僅か二か月ほどでこの世を去ります(1881年1月28日)。先に記したように写真家シャピロは、その死に顔を撮影する光栄を与えられます。我々は「ドストエフスキイの肖像画と肖像写真」の最終回・10で、画家クラムスコイによる死に顔のデッサンと共に、この写真について検討をする予定です。今回4枚の写真を以って見事にドストエフスキイを捉えたシャピロが、今度は死の向こうに去ったドストエフスキイを新たにどう捉えたのかという点で、この写真は我々に新たな関心と呼び覚ますばかりか、厳しい思索も迫ることでしょう。(了)